

月を仰いで

第六歩

吉水 岳彦

甘えることの大切さ

みおしえ

幼き子の足手も立たず、物もえ言われぬは、飢えたるにも寒きにも、ただ母をかこちて泣くより他の事なし。母その声を聞きぬれば、必ずゆきて助く。飢えたるらんと思えば胸をひらきて乳房をふくめ、寒かるらんと思えば、懐に入れて膚をあたたむ。されば飢えをやすめ、寒さをやむるは、ひたすら母の力にあり。詫びて泣くばかりこそ、子のわざにては侍るように、われらが身の智慧の心も賢しからず、行の足手も立たぬ事は、幼き子よりも、なお愚かなれども、さすが、ありはてぬ世もあぢきなく、長き迷いも悲しければ、助け給えと佛をかこちて、南無阿弥陀佛と称うる他は、励みえたるかたなし。

向阿証賢上人『帰命本願鈔』

かいせつ

法然上人が極楽に旅立たれて以後、その門下は正統性を争うようになってゆきます。浄土宗三祖良忠上人の門流に属し、現在の大本山清浄華院の実質的な開山上人である向阿証賢上人（一二六五—一三四五）は、法然上人のみ教えにさまざまな異説が唱えられている状況を嘆き、正しい念佛の法門を求めておりました。そんななか、たまたま京都の真如堂に参籠することになります。その際に、夢のなかで耳にした老僧と修行僧の問答をもとに著されたのが、『帰命本願鈔』『西要鈔』『父子相迎鈔』で、総称して『三部仮名鈔』と呼ばれる著作です。向阿上人は、夢のなかで念佛の法門を語り合っていた二人は釈尊と阿弥陀如来様の化現に相違なく、この教えを書きのこすことは如来様の勅命であるとの思いから筆を執っています。

『帰命本願鈔』の上巻では、第十八願の総論と念佛によつて救いとられる人々（第十八願文の「十方衆生」の解釈）について説き、中巻では信心の持ちようである安心（第十八願文の「至心信樂欲生我國」の解釈）と往生するための行為である起行（第十八願文の「乃至十念」の解釈）について説き、下巻ではすべての者を救い

とろうという如来様の誓願（第十八願文の「若不生者不取正覚」の解釈）について説いています。ここに引用している文章は中巻のなかの一節で、お念佛の救いがすべて如来様のお力によるものであり、わたしたちがすべてをおまかせ申し上げてお称えすべきことを教えています。その内容は、次の通りです。

生まれればかりの赤ちゃんは、足も手も立たないので四つん這いで歩くこともできず、言葉が発することもできません。だから、お腹が空くときも寒さを感じるときも、ただ母に泣いて不満を訴える他ありません。母は、そんな赤ちゃんの声を聞けば、必ずそばにかけよつて助けてくださいます。赤ちゃんがひどくお腹を空かせていると思えば、胸をひらいて乳房を口にくませてくださり、寒いであろうと思えば、自らの懐のなかに入れて肌をあたたためてくださいます。ですから、赤ちゃんが飢えることなく、寒さをしのぐことができるのは、まったく母の力によるのです。

わたしたち凡夫の身は、智慧の心が少しも賢くない上に、戒律や禅定といった修行の足や手もまったく立たず、そのありさまは泣くことしかできない赤ちゃんよりも、なお愚かです。また、どうやっても無常の世は自分の思うようにはならず、長く苦しみの世界を流転し続けるのも悲しいことです。それゆえに、赤ちゃんが困って泣くことのみを仕事にしていると同じよう

に、「助け給え」と阿弥陀如来様を頼りとして「南無阿弥陀佛」とひたすら称える他に、わたしたちが救われるためにできることはない、如来様の大慈悲の法門を説明して下さっています。

赤ちゃんはお腹が減って泣くことはあつても、悪念や悪意を起こすこともなく、殺生や偷盗等の罪を犯すこともなく、外見と内心が別々なこともありませぬ。一方で、わたしたちのあり方を振り返れば、気に食わぬことがあれば、すぐに「ムカつく」と悪意をむき出しにし、腹を立てては止めどなく他人の悪口を言い、自分の怠け心や利己的な心に基づく好き勝手なふるまいのうちに周囲を傷つけたり、困らせてみたり……。荒れた心の内面や日頃の生活を隠して、外面ばかり取り繕っているわたしたちは、「嘘をついたり他者を傷つけることがない赤ちゃんにも劣る」と仰せなのです。

さらに、無常の世の悲しみを目にしても他人事にしか思わず、今さえ良ければいいというような利根的な生き方のなかでは、戒律を守ることもなく、当然、心を修養することもありません。智慧があるといっても、周囲と比べて優位に立つために、他人を出し抜いていこうとする邪智ばかりで、修行を進めることはありません。そんなわたしたちを見捨てることなく見守り育み、救ってくださるのが阿弥陀如来様のお念佛のみ教えなのです。あたかも苦しむわが子を目にして悲しむ母親のように、内なる煩惱の飢

えと、積み重ねた罪業の寒さに苦しむわたしたちに駆け寄ってくださり、「南無阿弥陀佛」の名号の乳をふくませ、大慈悲の懐、すなわち摂取の光明のうちに入れてあたため育んでくださるのです。生きているうちから煩惱や罪業のきずなを断ち切り、いのち終わるときには極楽へと救っていただけるのは、ひとえに如来様のお力によるものであり、すべて如来様の大慈悲誓願の力という他力によるものなのです。赤ちゃんが泣いて母を呼ぶように、わたしたちがお念佛を申せば、如来様は私たちに寄り添い見守り、尽きぬいのちをもたらず甘露のしずくを与えて下さるのです。

おはなし

昨年、九十名以上の死者・行方不明者を出した大型台風の襲来からまもなく一年。今年も大型の台風が来るとのニュースを目にするたびに不安がよぎります。わずか一夜にして多くの人のいのちが失われたことは本当に恐ろしく、土砂や流れてきた建物などに傷ついたご遺体を迎えねばならなかったご家族の苦しさは、いかばかりであつたらうかと考えさせられます。

そんななか、テレビの報道番組で災害の様子が振り返られるたび、ご遺族に早くつらい苦しみや忘れて、早期に立ち直ってほしいという言葉が耳にします。きつと応援したい、なんとか元気づけたいという思いから発せられた言葉な

のでしょう。しかし、愛する人を突然に失うことのつらさは、そんなに簡単に乗り越えられるものではありません。また、早期に「立ち直ること」を他者から求められるのは、とても厳しいことではないかと考えさせられます。まずは、「どうしてこんな思いをしなきゃならないの……」と、つらい気持ちをそのままに、少しでも誰かにゆだねることが必要であるように思います。

例年であれば、関係する大勢の人が集まって供養を営み、悲しみや痛みを分かち合う時間も十分にとることができました。しかしながら、法事は新型コロナウイルス流行の影響で規模を小さくしたり、取りやめられることも増えていきます。本当は、コロナ禍だからこそ大切なことのように思うのですが……。

災害による死者も、コロナに感染して亡くなった方と同様に損傷の激しい場合には急ぎ火葬されることもあり、ご関係の方が亡き人のご遺体とゆっくりお別れの時間をとることができない場合もあります。故人と親しかった多くの人を葬儀に招くことができないことは悔いの残ることかもしれません。それゆえに、幾度も重ねて故人の死を悼み、後世の安寧を祈る法事という追善供養の機会を設けることは、一人では受けとめきれぬ大きな喪失の痛みを分かち合うことにもなるでしょう。そして、手の届かぬところへ旅立った亡き愛する人のことを想うと湧



いてくる、言葉にならない自らの感情のすべてを念佛の声に託し、阿弥陀如来様に受けとめていただくことが何よりも大切なことです。

平素、わたしたちは自分で思っている以上に、自分の生きるこの世界を信頼しています。病気になるれば救急車で病院へ運び込んでもらって治療を受けることができ、災害があっても必ず救ってくれる人がいて、科学は生活に便利をもたらし、家族や友人に裏切られることもなく、この普通の生活が続くのだと……。自分には、まさか「生きていられない」と思うほど苦しい思いをすることなどないと漠然と信頼しているのです。しかし、現実の人生では、想像もしていないような苦しみに遭遇することもあります。災害や愛する者との死別、そして裏切りなどは、わたしたちが漠然と懐く、世界に対する信頼という生きる土台を足元から崩すような苦しみでありましょう。

私事ですが、三歳になる姪っ子が、最近、「ママ、ご飯をたべさせて！」とせがむようになりました。幼稚園などでは、もちろん自分で食べることができているのに、家族のもとに帰ると甘えなくなるようです。わたしはつい、「もう自分で食べられるでしょう。がんばって食べなさい！」と甘えることを許さない言葉を口にしてしまいます。自分だって、きつと甘えさせてもらってきたのに……。思えばわたしも子どもの時には、良いことがあっても、悪いことがあつ



ても、なんでもお父さんやお母さんに聞いてほしくて、「ねえねえ、聞いて！」と素直に自分の内にある思いを言葉にできていたと思います。それが甘えであると同時に、無条件で自分を受け入れてくれることの安心感を得させてもらう時間だったと思います。そして、そうやって無条件に甘えさせてもらって育つからこそ、「ここで生きていてもいいんだ」と思える、生きる土台が形成されていくのでしよう。

ところが、大人になるにつれて、甘えは許されないものになってゆきます。会社に入れば社人なので甘えるなどたしなめられ、子どもができれば親になったのだから甘えるなど諭され……。たしかに、愛情を根っこにした厳しい言葉もあると思います。なるほど、その言葉をバネに大きく成長する人がいるのも事実です。しかし、そうやって苦境を乗り越えたり、がんばって苦しさをはねのけるためには、その足場がしっかりとしていなければなりません。その足場になるものは、幼いうちに甘えさせてもらうことで得られる、生きていくために不可欠な安

心感や自尊感情です。

でも、それらは老いて自分でできることが減っていくにつれて、また病気や死別、経済的な問題によって、はたまた人間関係のトラブルによって、大きく削られていくことがあります。それこそ、生活に困窮する人、奨学金を返せない学生、病気の人、シングルマザー、子育て中の親、ニート、引きこもりなど、何らかの困難を抱えている人には本当に苦しいことが多くあると思います。みな自分から望んでそのような状態になったわけではないでしょう。インターネット上では、そんな彼らに「甘えるな！」と責める書き込みが多数投稿されています。しかし、「自己責任」や「努力不足」と言われても、そもそも生きる基盤となる足場が弱い方が多くおられるのも事実です。つまり、そのすべてが本人の自己責任とばかり言えないこともあるのです。ここで本当に必要なのは、叱責や非難の声ではなく、差し伸べる手とあたたかな抱擁なのではないでしょうか。

苦しい時に、他者の好意に甘えさせてもらうことは、決して罪深いことではありません。誰も完璧な人間なんておりません。みな未完成のものであり、つねに迷いながらも精一杯生きるだけのお互いです。そして、本当につらい時には、しっかりと甘えさせてもらうからこそ、自分の生きる土台を保つことができ、やがて一歩を踏み出してゆけるのでしよう。

災厄に遭ったり、愛する人を不慮の事故で失ったりと、無常の世の中では思い通りにならぬことばかりで、苦しいことは尽きません。そんな世のなかだからこそ、常に見守りと導きと救いを与えてくださる如来様ありがたいのです。つらい時に、しっかりとうけとめてくれる母のような如来様の存在は、本当に尊いものです。

数年前の夜、路上生活者への炊き出し夜回りをしていた時のことです。おにぎりを渡した男性に「いまお困りのことはありませんか？」と尋ねると、「実は僕、一週間前、海に飛び込んで死のうとしたんですが、巡視船にみつかって引き上げられてしまったんです。昨夜も川に飛び込んだんだけど、死ねなくて……。今夜こそ、ちゃんと死にたいと思っっているんです」と言う

ではありませんか。また、「病気もあって生活保護で暮らしていたけど、生きていく意味がわからなくなりました。だって、誰も僕に話しかける人なんていなかった。僕



に生きていく意味なんてあるんでしょうか？」と語りました。わたしは聴いていて、胸をぎゅっとつかまれたように苦しくなりました。

しばらく話しているうちに、彼は誰ともつながっていないと感じていて、その孤独感に耐え切れなくて死にたいと考えている様子でした。そこで、「豊かな人間同士のつながりを感じながら生きられる場所があるので、もしよろしければ少しだけ死ぬのを延ばして、そこへ一緒に行ってみませんか？」と尋ねると、彼は少し考えてからゆっくりとうなずいてくれました。自分のことで迷惑をかけるのではないか、本当に甘えていいのかと心配しつつも、心を預けてくれたのです。また、翌朝一緒に何を食べたいかを聞くと、少しはにかみながら「モスバーガー」と答えてくれました。

翌朝、近くのモスバーガーで待ち合わせ、山谷にある生活支援を行う団体のもとへ共にゆきました。彼はやさしい人たちの迎えに安堵あんどして、そこで生活再建を行うことを決意しました。その後、時折、悩むことはあったものの、彼は抱えていた大きな借金を数年ですべて返し終え、いまでは長屋のような環境で安心して暮らしています。

そして、先日、コロナ禍で行政から出された特別定額給付金の十万円が手に入ると、なんと彼はそのお金で山谷の生活支援団体とわたしたち「ひとさじの会」に、それぞれ八十キロもの

お米を寄付してくださったのです。彼は満面の笑みでこれまでの感謝の言葉を語るとともに、困っている子どもたちや在日外国籍の方々などにお米が行き渡ることを喜んでくださいました。わたしにとっても、本当に幸せな時間でした。

本当に苦しい時、他人の好意に甘えることは、簡単なようではなかなかできないことです。でも彼は自分の苦しい状況を素直に見つめ、一時期、しっかりと周囲の人の力を借りることができたからこそ、今日は他者の苦しみのために助力する人になったのです。何も出来ぬことを認めることは、思う以上にとっても苦しい作業であり、勇気のいることです。でも、そうして身をゆだね、安心できるまですつと見守ってくれる人たちの中にいたことが、彼の支えとなり、再び踏ん張って自分の人生を生きてみようと思う力となったのです。彼には、本当に尊い姿を見せていただきました。

思うようにならないこの世のなかで、みなそれぞれ生きる場所で精一杯がんばって生きています。もしかしたら、みなさんも、これから立ち上がれぬほどのつらい経験を重ねばならぬかもしれません。そんな時には、わが身の拙さを素直に認め、父母を呼ぶ赤子のようにお念佛を申して阿弥陀如来様をおそばに感じましょう。そして光明の懷に甘えさせてくださながら、どんなに苦しい状況でも生きてゆけるようにお育てを賜りましょう。